総合研究所特別研究
概要報告(平成15年度)

世界遺産のある都市の比較研究

―― 奈良を中心に ――

奈良班

文学部史学科　寺　崎　保　広

1．春日神幸図の調査

春日若宮おん祭に関わる重要史料でありながら、従来全貌が紹介されることのなかった「春日神幸図」について、その所蔵先である国立公文書館（内閣文庫）に出張し、現物を閲覧の上、その現状を把握し、今後の写真撮影について打ち合わせを行った。同図の史料的な意義および価値については別紙参照のこと。今後のことであるが、写真資料を大学に収めた後、最終的には翻刻にまでいたりたいと考えている。(担当：笠置侃一)

2．世界遺産屋久島の「岳参り」登山経験者の聞き取り調査

屋久島出身者で、約50年前に「岳参り」を経験された方々に集まっていただき、かつての実態をうかがい、江戸時代以来と見られる伝統的な習俗について、聞き取り調査を行った。自然遺産としての屋久島と人間との関わりを示す貴重な材料となると思われる。内容的に屋久島班とも関連するが、担当者（鎌田道隆）の関係で、奈良班として報告する。

3．櫻井満旧蔵資料等の調査

故櫻井満氏は民俗学および万葉学者であるが、その旧蔵資料のうち、民族誌・大和資料・押花などを実見し、調査をおこなった。中には、奈良班のテーマに関わる材料が含まれていることを確認した。その他、東京方面では専修大学・東京大学所蔵の資料の紹介を受けた。(担当：上野誠)

4．国際シンポジウム「世界遺産のある都市」への参加

2003年11月30日に、奈良大学講堂で行われた同シンポジウムに際して、奈良班からは、鎌田道隆が「世界遺産学創生」と題して講演を行うとともに、奈良班の担当分として、奈良市教育委員会の中井公氏に依頼し、古都奈良の文化財についての報告をしていただいた。

鎌田道隆講演は、世界遺産という考えが、経済発展と戦争という20世紀の反省から生まれ、

自然と人間との関わりの深さを見直す新しい思想であること、そしてその考えをもとにし、大学としてこれに取り組むために、世界遺産コースを初めて設けて、現在あたらしい学問として取り組んでいることなど、現状と課題に触れつつ示した。

中井公報告は、世界遺産登録時における各国の比較、登録後の「町づくり」の課題、奈良登録にあたっての問題点などを指摘し、奈良の世界遺産登録によって様々な面で突破口を開くことができた点を強調した。

春日若宮おん祭と「春日神幸図」

奈良大学名誉教授　笠　置　侃　一

おん祭のあらまし

春日若宮おん祭は、保延２年９月17日（1136）に関白藤原忠通が、五穀豊穣国民安寧を祈願して始めた。現在は、毎年12月15日から18日まで執行される。

国の「重要無形民俗文化財」に指定され、神事のなかに御巫神楽（みこかぐら）、田楽（でんがく）、細男（せいのお）、猿楽（さるがく）、舞楽（ぶがく）など、日本の芸能の歴史を目のあたりにできるので、「芸能の祭典」「芸能の博物館」などともいわれる。

祭典はいろいろな準備や手続きを経て行われるが、12月17日に正午から奈良県庁前広場を出発して、JR奈良駅から三条通りを通って御旅所までの「風流渡御行列（ふりゅうとぎょぎょうれつ）」のいわゆる「お渡り」は平安時代から江戸時代に至る時代風俗行列として有名である。そのなかで、興福寺南大門跡の「交名の儀（きょうみょうのぎ）」や、一の鳥居内の「松下の式」の、特に影向（ようごう）の松の下で行われる各種芸能の儀式の華麗さは人々を魅了してやまないのである。

また、御旅所で、仮御殿の前の舞台の両側に金色燦然と輝く鼉太鼓（だだいこ）を据え、篝火のもとで、午後３時半頃から午後10時半すぎまで奉納される各種芸能は、神と人との美しい、楽しい一夜の宴（うたげ）なのである。

この一日の為に、12月17日午前０時から御子神（みこがみ）を仮御殿に遷し24時間以内に、また元の社殿に遷すというおん祭の原点ともいうべき儀式が、現代に至るも連綿と行われてきたのである。

その中で、美しい行事であるからこそ多くの記録が遺され、特に美しい貴重な絵巻物などが多く残されてきたのである。

「春日神幸図」復刻の意義

しかし、明治維新を境にして、廃絶したもののあまりに多いのに驚く。儀式や行事について春日大社や、南都楽所でも随時復興に努めてはいるが、まだまだ不明なものが多い。そのよう

ななかで、重要なものは絵画資料の類であろう。

今回の「春日神幸図」も、その存在が有識者の間では、その価値が認められてはいるが、未だに公刊されていない極めて貴重なものである。この「春日神幸図」の復刻は、特に意義深いものと思われる。

「春日神幸図」に関する詳細資料を春日大社から提供いただいたので、ここに紹介する。

《春日神幸図》

3帳　国立公文書館　内閣文庫所収（特109－1）

1丁が縦68cm、横45cm、厚さ約14cm

折本仕立の非常に大型の図帳で、1紙が1頁を構成する。

本紙（描画のある紙葉）上巻59紙、中巻51紙、下巻61紙（上中下は、内容による便宜的なもの）

各帳ごとに杉箱に収納される。

（上記は非常に大まかな調査によるものなので、若干の訂正が予想される）

春日祭と春日若宮おん祭の諸儀式を極めて詳細に描いており、殆どの場面が極彩色で丁重に仕上げられているが、下帳の御旅所祭から還幸の儀にいたる31丁が白描、2丁が一部彩色である他、巻頭6丁、巻中に2丁の白紙があり、未完成であることを窺わせる。

上巻は春日祭諸儀と、おん祭の大宿所御湯、宵宮詣等前儀、御還幸と、おん祭当日の南大門渡りが描かれ、中巻は、松の下渡り、下巻は松の下渡り後半と御旅所祭と還幸等が中心に描かれる。（画面は、主として右から左へ（前から後へ）と配置されるが、絵が何紙にも渡って続くお渡りの場面は、左から右へ（後から前へ）と流れるため配置に若干の混乱が見られる。つまり中巻は巻末が絵の始めとなり、下巻は、巻末にお渡りの図が描かれる。）

本図帳の特徴は、

第1に、大型で詳細であり、かつ絵画として非常に巧緻であること。

第2に春日祭の絵図を納めることが貴重である。春日祭絵図は、他には、同じく内閣文庫の「春日御祭礼興福行事」（絵巻3巻本）に一部が描かれる程度しか知られていない。なおかつ本資料の方が格段に詳細で、資料的価値は、極めて高い。

第3におん祭の諸行事も詳細を極めており、他の資料では、描かれない場面が多く描かれている。詳細な検討は、今後の課題だが、瞥見しただけでも、大湯屋での衆徒蜂起、頭坊稚児の宵宮詣で、別會三綱の御旅所出仕など興福寺の関与を描く場面が詳細である点、大名行列における槍投げを描く点など今まで明らかにし得なかったおん祭の儀式を解明する手がかりを多く含んだ図巻であることは疑いない。

奥書等はなく来歴は、不明だが、春日大社に、本資料の下書きを綴ったと思われる